

座談会

新たな北海道の可能性に向けて

北海道開発局 開発監理部開発計画課

国土審議会北海道開発分科会は、平成10年に閣議決定された第6期北海道総合開発計画が平成19年度を目標年度としていることから、平成17年11月に基本政策部会を設置し、計画の点検と新たな計画のあり方について調査審議を行い、その結果を去る9月29日に「中間とりまとめ」として公表、広く国民意見の募集を行っています。

本座談会では、その一環として、道内で活躍されている有識者の方々にお集まりいただき、これからの北海道や北海道開発のあり方について議論していただきました。



田村 亨氏 室蘭工業大学教授
 麻田 信二氏 農業、前北海道副知事
 植松 努氏 (株)植松電機専務取締役
 門脇早江子氏 (株)C.I.T & 体験型ワイン工房みかさ代表
 コーディネーター
 山崎 隆志氏 北海道新聞社論説委員

山崎 まずは、北海道について皆様それぞれの立場で経験されたり、日頃考えておられることをご発言願います。

麻田 道庁を退職し、この4月から長沼町でベリー類を中心に果樹園を営んでいます。



麻田 信二氏
 農業。前北海道副知事。道庁時代はほぼ一貫して「農政畑」を歩む。本年3月末副知事退任後、長沼町でブルーベリーやブラックベリーなどの果樹農家へ転身。

私は北海道で生まれて、32年間道庁で仕事をしてきました。後半の20年間には、1985年のプラザ合意以降国際化がどんどん進み、貿易自由化の問題があり、また、それまで北海道経済を支えてきた北洋漁業や炭坑がどんどん落ち込んでいきました。私は北海道が自立していくには何をしていけばよ

いのかということを道庁の農業行政の中でいつも考えてきましたが、一番よく考えたことは北海道の資源をもう一度見つめ直して、世界に通じるものを新しく作り出していかなければならないということです。それが農業と観光でした。

他府県の方々と話をすると、北海道は農業について恵まれているとوراやましがられます。観光についても、農村景観が大きな役割を果たしており、農業あつての観光であるとは思っています。観光資源である農村景観は、そこに住む人たちが楽しく農業をやりながら守っていかなければ、世界に通じる観光資源にはならないと思います。

このような可能性を持つ農業を自分でやりたいという夢がやっと実現したところです。

植松 当社の本業は宇宙開発ではなく、リサイクル用の機器を開発しています。



植松 努氏

(株)植松電機専務取締役。三菱重工業勤務などを経て2000年(株)植松電機(赤平市)入社。北海道大学やNPO法人北海道宇宙科学技術創成センターと連携し、道産ロケット開発に乗り出す。本年から同NPO法人理事を務める。

私は1994年まで名古屋の会社にいたのですが、故郷の北海道、空知が好きで戻ってきました。ところが、北海道の人は自分たちの地域の良さにあまり気がついていないことがわかりました。これをぜひ変えていきたいと思っています。

北海道全体にもいえることですが、空知には人の手を加えなくてもきれいな景観があります。地域の魅力

とは、美しいものや魅力的なものをつくるためにお金をかけることではなく、そこに住んでいる人がその地域に魅力を感じ、住んでいる人自身も魅力的であることだと私は思っています。

私が宇宙開発に取り組んでいる理由は、思考する人を育てたいと思っているからです。自分で考えながら、大人も子供も楽しみ、そして感動する。このような試みができるのは北海道しかない。ロケットも人口密度が低いところであれば打ち上げられないわけです。

門脇 体験型のワイン工房をやっています。元々ワイン工房はカナダが発祥の地で、バンクーバーでは40軒以上存在する事業です。そこで私が勉強していたときに、「どうしてこんな面白いことを日本ではやっていないのか」と日本から来た観光客にいわれたことがきっかけでした。私は秋田県の出身ですが、北海道で挑戦してみようと思ったのは、人のおおらかさ、よそ者である私をすんなりと受け入れてくれる温かさがあったからです。

日本には気軽にワインを飲む感覚がないのが残念だったのですが、ないからあきらめるのではなく、ないなら今後広まる可能性があると思ったのです。私を受け入れてくれた三笠市のためにも、この事業を通じてこのまちの名前を全国に広めることができればすてきな事だと思っています。

今ほど計画の目的が重要になっているときはない

田村 10年前ころから国土計画に携わっているのですが、この10年間でずいぶん世の中が変わったという印象を強く持っています。何が変わったかといえば、人づくりが前面に出てきました。大学の授業でも、「自分でものを考えてごらん」という人づくりの話題が多くなりました。

最近特に気になっていることは、「計画を立てる目的は何なのか」ということです。今ほどこのことが重要な時期はないと思います。かつての経済が右肩上がりのころは、ただ予算の範囲内でこなしていけばよかった。しかし、これから長寿社会、成熟社会といった時代の大きな変わり目の時期には、さまざまな情報を集め、道民の総力を挙げて、的確に状況判断することが必要です。変わり目のところで失敗するとあとあと大変なことになるでしょう。今回のパブリックコメントを含め、道民に自分たちの計画だということをできるだけ考えてもらわなければならないと思います。

また、これからは人口減少やグローバル化により、地域の「差別化」が進むということです。今までは財政的にも余裕があって公平性が重視されてきましたが、これからは一生懸命自分たちの地域のことを考えていかないと誰も手を差し伸べてくれない。そのような差別化が始まるのが、長寿社会、成熟社会です。時代の変革点において、明確な目標を地域住民が作るために、計画にぜひ参加していただきたいというのが私の思いです。

例えば、広島市では「平和」がキーワードとなっているように、北海道といった時に道民がどのようなキーワードをつくるのかというチャンスが、今回われわれに与えられています。各地域それぞれのキーワードを地域の意見の中から発掘し、自分たちで地域をつくるという意志を道民に持ってもらいたいと思います。



山崎 隆志氏

北海道新聞社論説委員。1977年北海道新聞社入社。本社政治部(現報道本部)、東京支社政治経済部などで主に政治・行政部門を担当。遠軽支局長を経て2003年から現職。

山崎 日本ハムや駒大苫小牧の活躍、旭山動物園の人気、ニセコ地域の活況、銘柄米に負けないコメや、アジアで人気の農水産物など、ようやく北海道のポテンシャルが表に出つつあると感じます。北海道らしい北海道というところを、北海道の中から発信していければよいと思います。

食と観光というのが一番最初に出てくるキーワードだと思いますが、この点いかがですか。

門脇 当初は予想していなかったのですが、道外からの注目が非常に高かったことに驚きました。最近も九州から修学旅行に来た高校生のグループ

がワインづくりを体験し、大変喜んでいました。また、多いのは札幌に宿泊され、日帰りですべてのスポットを探しているという方々です。札幌市から三笠市までは車で約1時間の距離ですので、レンタカーで来られて2時間ぐらい体験されていくという道外の方が多そうです。道外から来られる方々の9割がインターネットで検索して来られるようです。皆さんインターネットを日常的に利用されている方々ばかりで、そこから口コミでも広がってきています。



門脇 早江子氏

(株)C.I.T & 体験型ワイン工房みかさ代表。ホテルオークラ本社入社後、オランダ支店へ3年間の出向。札幌のワイン販売会社に入社し、カナダ店勤務となる。カナダにおいて醸造技術を修得した後、独立。昨年8月に「体験型ワイン工房」を三笠市内にオープン。

山崎 北海道の各地にこのような体験型のワイン工房があると楽しいですね。

門脇 そうですね。北海道に来たらワインづくりを体験できるということが、もっともっと普及していくことを期待しています。

北海道で何かしてみようという人のための長期的なインフラ整備が必要

麻田 農業や観光に限らず、北海道には素晴らしいものがたくさんあります。そこで必要なのは、こうした素晴らしいものを使って北海道で何かしてみようというやる気のある人が出てくるような長期的な環境、インフラ整備ではないでしょうか。

雇用が大変だというと企業誘致という話になりがちですが、補助金を出したからといって企業が来るわけではない。工場が来るのは、そこに原材料があるか、製品が近くで売れるか、それ以外には人材です。

北海道は人材が豊富です。北海道出身の人で、北海道で場所があれば働きたいという人が多いです。アイシン精機にしても、北海道に人材があるからやってくるわけです。そういった必然性がある反面、雇用のミスマッチが発生しています。

地球全体のことを考えたときに、人口問題、環境問題、食料問題は大きな問題ですが、北海道はそういう面でも世界に貢献できるいろいろなものを持っていると思います。そこで、子供たちが北海道でビジネスチャンスをつかみ、起業する気になるかどうか重要で、そういった人材をどれだけ育てられるかだと私は思います。

また、実際に農業をやってみて感じたことは、「土づくり」ということです。先日亡くなられた木村尚三郎先生^{※1}が、「科学技術が進み、成熟した社会になったときに、土とのふれあいがなくなってしまったら、五感が鈍くなり、科学技術の進歩そのものも止まってしまう」と盛んに文明・文化論を論じておられました。また、「国家の品格」の著者、藤原正彦さんは、「ノーベル賞受賞数学者の出身地は、ほとんどが美しい田園だ」といいます。いかにして北海道の中で、五感を使って働くかだと思います。

実際に長沼町でグリーンツーリズムを行っていますが、開発局もいろいろな事業で基盤を整備していますし、光ファイバーでインターネットも自由に使えます。長沼町ではグリーンツーリズムで特区を取りました。昨年道外の修学旅行生を受け入れ始めましたが、昨年は250人、今年は1,000人を超え、来年は3,200人を受け入れる予定です。話を聞くと、関東、関西から来た高校生が作業体験をして家に帰ると、親から「子供の雰囲気なんとなく変わった」という電話や手紙が来るそうです。今年、私の農場でも東京の女子高校生がブルーベリー摘みを体験し、大変感激して帰っていききました。こうした経験の中から人材が養われていくのです。

ものづくりのためには、まず「人づくり」が重要

山崎 北海道はものづくりが弱いといわれますが、経営者がうまく指標を与えることによって、組織がうまく動いて、ものもできてくるのではないかと感じます。植松さん、この点いかがでしょうか。

植松 今の時代、ものづくりのための機械や材料も簡単に手に入り、インターネットの普及により情報も大量に手に入ります。また、機械の加工精度も上がっているのも、ものづくりはとても楽にできます。問題はそれらを使いこなす「人」がいないということです。今から約100年前にライト兄弟が飛行機を飛ばしましたが、その時使っていた材料が今はホームセンターで簡単に手に入ります。しかし、ライト兄弟のようにものを創ろうという「人」がいないのです。

当社でやっている無重力実験施設では今までに

※1 木村尚三郎：歴史学者。東京大学名誉教授、静岡文化芸術大学学長、食と農の応援団団長などを務める。

200回ほど実験を行っていますが、一度もお金をもらったことはありません。というのは、お金がかかる実験だと誰かを説得してお金を得なければなりません。お金を得るための計画書には、「だめかもしれません」とは書けません。そうすると、うまくいく計画、失敗しない計画しか書けなくなるのです。それだと、実験は単なる確認試験に終わってしまい、奇跡は起こりません。さまざまなことにチャレンジして、失敗は失敗というデータとして活かせるような環境がなければ、おそらく発展というのはあり得ないだろうと思います。ありとあらゆることを試せる環境を、広大な北海道につくることができれば、いろいろなものが生まれてくるのではないかと思います。

9月23日に打ち上げた人工衛星がいま地球を1日15周回っています。それを試験するために、真空チャンバー^{*2}という実験装置を作りました。買えば2億円もするものですが、自分たちで創意工夫して20万円で作ってしまいました。

「だったら、こうしてみたら」と思う人をつくることがとても大切です。そんな人というのは、「できないと思わない人」です。かくかくしかじかできませんという理由があれば、それをひっくり返せばできる理由になる。多くの場合、世の中には、できませんと言ってテコでも動かない人が多いです。やったことがないからできません。知らないからできません。でも、やったことがなければやればいだけけです。知らなければ知ればいだけけです。これからの北海道には、できる理由を見つけて動ける人間をつくる必要があります。そのためには、失敗の責任の取り方、すなわち「反省」を考え直す必要があります。本来の反省とは再発を防止することです。犯人を捜して土下座させるのは反省でも責任でもありません。正しい反省の考えさえあれば、みんな怖がらないで失敗でき、責任をとることもできます。今は、責任をとることを回避する社会だから、みんなが無責任になってしまいました。おかしい事を見つけたとき、「こうした方が良いのでは」と思っても誰も意見を言えません。だから製造物の事故やリコールが増え社会問題になっています。もしかしたら、変な責任の取り方をしなくてすむ社会をつくると

^{*2} 真空チャンバー (chamber) : 宇宙空間と同じくらいの高真空状態を作り出す装置。

いうことが、ものづくり、人づくりのために一番重要なことなのかもしれません。

人の価値をもっと引き出せる社会をつくることのできたら、きっとみんな一生懸命勉強するようになると思います。

山崎 そのためには、人づくりのための条件整備、インフラ整備が重要になってくるわけですね。

必要な条件を整え、地域の発意を待つ

田村 二つお話ししたいと思います。

北海道は広域分散型の地域構造をしています。今、私の調査フィールドは天塩中川です。そこから約90km離れたところに名寄市がありますが、名寄と中川の間で通学ができないものかと私は考えています。名寄では多くの診療科目を持つように病院を高度化します。そして、名寄に住んでいる子供たちは自然豊かな中川や興部などの農村部に通学させる。私の考えているそのような事例が、スウェーデン北部のウメオというまちにあります。人口約10万人のまちなのですが、子供たちは100kmくらい離れた人口1万人くらいのまちへ、コミュニティバスを使って平気で通学しています。そのような都市と農村の連携が北海道でもできないものかと考えています。このような考え方は人口減少下の農村集落の持続的発展という点から大事な議論になっていくのではないかと思います。

もう一つ、EUの農業委員会の取り組みの話を紹介します。スコットランドの条件不利地域の活性化のために、パリから専門家が派遣されたのですが、そこで専門家が何をしたかという、積極的にこうしろあしろとは言わず、地域の発意をただ待っているだけというのです。今までの国、道も含めた行政は、すぐ地域住民の前に出てお節介を焼く。そうではなく、行政は後ろに隠れて、必要な条件は整えつつも、地域の発想を待つ

て引き上げるというわけです。もちろん、人づくりのインフラの部分で「公」の部分も必要ですが、「私」の発芽を待つというやり方が必要だと思います。

都市と農村の環境をどのようにつくるかということ、人づくりのインフラをどうするかが大切だとい



田村 亨氏
室蘭工業大学工学部建設システム工学科教授。国土審議会北海道開発分科会基本政策部会専門委員など各種委員を務める。

ことです。それさえわかっているならば、具体的なインフラの話は地域から自ずと出てくるものだと思います。

山崎 一昨年秋田へ行ったときに、地元の業者の方から「北海道日本ハムはどうですか」と聞かれました。私は野球にほとんど関心がなかったのですが、何がそんなに面白いのかと思っていましたが、今年はこのような状況になりました。やはり、住民の感情が沸き立つようなものがないと、愛郷心のようなものもなかなか生まれてこないと思いました。開発局のハードの面とは別の話になりますが、住民からの盛り上がりももちろん大事ですが、何か一つ仕掛けをすると面白いものが生まれてくるということもあると思います。



植松 北海道は魅力的ですばらしい場所だと思います。それと同時に、市町村合併が成立しないくらい広域に点在した地域を整備しなければならぬ大変な時期を迎えているとも思います。暮らしと自然の魅力が共存できるような環境をつくる必要があります、そのためには北海道のことを好きな人を増やすことが大事で、好きになるためには外を知らなければなりません。もっともっと外を見る環境をつくることや、外から来た人の話を聞くことが大切です。

北海道には雪が降るといった特性がありますが、それはそれで魅力の一つです。北海道で通用するものをつくれれば、北欧圏で通用するかもしれませんし、暮らしの中で困ったなと思ったことを知恵を使って克服していけば、おそらく北海道は良い地域になると思います。

私の工場で心がけていることは、稼働率を100%にしないことです。というのは、新しいことを考えるためにはゆとりが必要だからです。

ゆとりを持つためには、せこせことした生産・消費一辺倒の暮らしを改める必要があります。余裕の時間をつくって新しいことに挑戦することで、失敗や成功を繰り返すと、能力が高まります。そのためゆとりを生み出すためには、生活することにお金のかからない仕組みが必要です。

北海道は除雪をするのにお金がかかります。それなら除雪をしなくてもよいまち、1シーズン分の雪をそこに置いておけるようなまちをつくれれば

いいのです。どうやったらお金をかけなくても暮らしていけるのかを、北海道人はもっともっと真剣に考えるべきです。そのためには、断熱のよい家を考えたり、住宅ローンで困っている人が多いなら建設コストが1/10の家を考えると、かまどのメリットをもう一度考えて熱効率のよい調理器を考えると、ありとあらゆることについてどうやったら消費がもっと少なくなるのかということ的前提を考えれば、北海道は厳しい環境だからこそよいテストフィールドになると思います。

北海道は交通死亡事故ワースト3に入っているのに、なぜまちや道路を変えるという研究をしないのでしょうか。事故のサンプルはたくさん得られるわけで、その研究成果を本州に返していけば、本州にとってもプラスになります。今ある状況、環境をうまく活用してそれを改善する試験を行い続けることが北海道のチャンスにつながると思います。

山崎 ワインのことはよくわからないのですが、ワインはフランスでなければとか、フランスでもボルドーでなければ駄目だとかいう、ワイン通ぶっている人に対して、それは違うということの説得力を持って言うには、どのような手があるのでしょうか。

門脇 ワインのことについて話したい方は話し出すと止まらないですから、そうなんですかといつも聞いています。ただ、日本人特有かなという感じはします。



ヨーロッパのようにワインが普及している国に行くと、そういう話をするのはそれを職業としている方だけで、一般の方は本当にごく純粹に、私たちが日本酒や焼酎を飲むような感じで、肩肘はらない飲み物として浸透しています。ですから、日本でもそういう考え方がもっと広がっていけばいいなとも思います。ソムリエを悪く言うつもりはありませんが、うちのスタッフに対しても、来ていただいたお客様に対してはそういうことは言わないようにしましょうともいつも言っています。ワインを初めて飲む人が、これおいしい飲み物なんだね、というような感じで、手に取りやすいものとして認識してもらえようになりたいとも心がけています。

山崎 門脇さんのところで体験用に使うブドウ

は、北海道産に限ってはいないんですよ。

門脇 はい。いろいろなところのブドウを使っています。種類を多くし選択肢を多くすることによって、自分の好きな味を選ぶ楽しさを感じてもらいたいと思っています。

山崎 三笠市で事業をやることの意味は何かあるのでしょうか。

門脇 深く考えて三笠市にしたというわけではありません。私にこの事業を教えてくれた方が三笠出身ということもあったのですが、三笠に行ってやってみようかなと思ったときに、市や観光協会の方々がすごく温かく迎えてくださって、私はここでならやっていけるかなと思ひ、事業を始めました。



山崎 他のまちであつても、温かく迎える気持ちがあれば、門脇さんのような人がどんどん入ってくるといふことになると思ひます。自分の経験からは、北海道には無理にこだわらない方がいろいろ面白いものができるというのがあります。その場所として北海道の空気や景観、住んでる人の気持ちといったものが味付けとして大きいのではないのでしょうか。

門脇 周りにこういう人たちがいるところだったら私も頑張れる、というようなエネルギーをもらえるところがいいと思ひていました。

ゆとりを持ちつつ、自分が好きなことを楽しむ発想

山崎 麻田さんは、収穫したものをどのように活用されているのでしょうか。

麻田 今は物がないので、摘みに来たいという人を断っている状態です。こういった人はすごく多いと思ひています。

これからの北海道には、「新庄選手」の発想が必要となってくるでしょう。メジャーから日本へ、本州ではなく北海道、セ・リーグではなくパ・リーグ。ゆとりを持ちつつ、自分が好きなことを楽しむ発想です。そういうチャンスをもみんなに与えられるような北海道になることが必要なのではないかと思ひます。このことはいろいろな方面の産業振興についても言えることではないのでしょうか。



山崎 その手のものは、金の力でやろうとすると失敗するということになりがちですよ。植松 お金をかければ良いというものではありません。「いくらかかったか」に価値を感じているようでは駄目です。自ら価値を見出す人を育てなければいけないと思ひます。自分で評価し、問題は自分で解決する、そのためには、よく考える人を育てることが大事です。しかし、残念ながら今の教育は、暗記することが多く、しかも受験に関係のない教科はどんどん失われていきます。そもそも勉強とは「やりたいこと」を達成するための手段のひとつでしかありません。ちゃんと考える子供を育てるためには、「好きだから覚えない」という気持ちをつくるために、小さいころから持っている「好きだから」を伸ばせる社会をつくる必要があります。そうした新しいチャレンジが

また、北海道に対するニーズはものすごくあると思ひています。昨日は大阪のホテルに泊まったのですが、十勝牛、北海地鶏、蝦夷ばふんウニ、ホタテ、と北海道の食材ばかりでした。われわれが宣伝しなくてもそういう時代になったのです。観光をみても、東アジアには約20億の人口がいますが、北海道に対する期待がものすごくあります。東京でアンケートをとつても、行きたい観光地の一番は北海道なのです。

来た人が楽しかった、また来たいというようなものを用意できるのであれば、どんどん人をひきつける力になり、交流によっていろいろな情報が入ってきて、またそれに応えることによって、さらに進化していくのであろうと思ひます。私は、これは個人なり、地域が自立していくということだと思ひています。ある意味、ライバル関係ということかもしれません。ところが今までの発想でいけば、商売敵ができた嫌だということになります。しかし、私はそうではないと思ひます。

長沼町にもファームレストランがどんどんできていますが、ひきつけるものがあれば人はやって来ます。長沼は去年からみるとかなり人が入ってきています。私が出している直売所も去年の倍の売り上げでした。それくらい人が魅力を感じて来るのです。観光にしても、門脇さんのような取り組みにしても、人に頼らず自分で発想していけばつながっていくのではないかと思ひます。地域、地域でお客さんに喜ばれるものをいかに情報発信して取り組んでいけるかではないのでしょうか。

山崎 その手のものは、金の力でやろうとすると失敗するということになりがちですよ。

植松 お金をかければ良いというものではありません。「いくらかかったか」に価値を感じているようでは駄目です。自ら価値を見出す人を育てなければいけないと思ひます。自分で評価し、問題は自分で解決する、そのためには、よく考える人を育てることが大事です。しかし、残念ながら今の教育は、暗記することが多く、しかも受験に関係のない教科はどんどん失われていきます。そもそも勉強とは「やりたいこと」を達成するための手段のひとつでしかありません。ちゃんと考える子供を育てるためには、「好きだから覚えない」という気持ちをつくるために、小さいころから持っている「好きだから」を伸ばせる社会をつくる必要があります。そうした新しいチャレンジが

できるのは、歴史が浅い故に、しがらみや複雑な人間関係の少ない北海道の大地なのではないでしょうか。

山崎 先ほどから、人づくり、教育の話が出ていますが、根本的には子供がだんだんいなくなるとか、北海道では医療をきちんと受けられる地域が一部大都市に限られてくるとか、北海道は捨てたものじゃないかと思ながらも、少子高齢化、医療、教育など、問題も多いと思います。

田村 先ほどのウメオの話ですが、約30年前にウメオ大学ができたのですが、ここには特にバイオを中心にノーベル賞クラスの科学者がごろごろいます。彼らはストックホルムではなくウメオに住み、ハンティングや釣りなどをしながらのんびりと楽しそうに過ごしています。本州と違い伝統などにあまり縛られない北海道では、このようなライフスタイルを参考にしつつ、新しい長寿社会、ゆとり社会のスピリッツをつくれるのではないかという気がします。

門脇 確かに、北海道にはすんなり新しいものを受け入れてくれる態勢があると思います。

田村 札幌、函館、旭川、釧路、北見、帯広の6つの都市だけで北海道のことを考えようとしますが、この6つだけだと北海道の半分しか議論していないと思



います。残りの地域はどうなのかということを実際に考えないといけません。確かに人口は少ないですが、その地域があるからこそ農村景観があり、北海道らしさがあるのです。他方、札幌にはもう少し頑張ってもらいたい。最近、なぜか札幌以外の地域の人々の方が元気がいいと思います。

植松 1を100や1000にすることについては、われわれは中国にはかないません。でも、ゼロから1をつくり出すようなことやれば、日本の価値は保てると思います。そして、そのことをしっかりと評価してくれる人がいれば、仕事として続けることができるし、新しいものをつくり出すという文化自体を北海道がつくり出していければ、誰にとっても住みやすい地域となるのではないのでしょうか。

麻田 今後は都市と農村のバランスが必要になってくると思います。農村に住まなければならないというわけではなく、マルチハビテーションでも

よいのです。1年の3分の1を田舎で暮らして、残りを都市で住むということが求められている時代になっていると感じています。

北海道の農業生産をいくら高めても1千万人分くらいの食料しか生産できません。しかし、品質の良いものを生産すれば、世界中からアクセスが来る時代になっています。都会に住まなくても、地域で好きな仕事を楽しくやれば、人を自然にひきつけていくと思います。私はそう思って農業をやっていますし、芸術の分野でも、ものづくりでも、同じことがいえると思います。中高年が夢を持ちながら楽しく仕事をしている姿を子供に見せられれば、子供たちもいろいろなことに挑戦して好きなことを見つけることができるのではないかと思います。

人をひきつけるものを持てば、たとえ小さな村でも人は訪れる

門脇 どんなに小さな町や村でも、ひきつけるものが何かあると、お客さんは足を運んでくれたり、アクセスしてくれたりします。私は三笠という小さなまちにいますが、来てくれる人は「体験型ワイン工房は三笠にしかないから」と言ってくれます。「自分たちの住んでいるまちは小さいし、何もないから」という考え方を捨てて、何かひきつけることをやれば、自然に人は集まると思います。**植松** 光ファイバーを活用して、スポンサーや視聴率に支配されない北海道の放送局をつくることができれば面白いと思います。例えば、体験型ワイン工房に来る人たちの笑顔を映像として流せば、来なくなる人が増えるし、わが社でロケットが爆発している映像を見せれば、関心がある人が来てくれるかもしれない。そういった可能性があるのが光ファイバーだと思うのです。

山崎 まずは、北海道に住んでいるわれわれが生活を楽しみ、北海道ならではの価値をつくっていく…、ひいては世界をひきつけていく…。また、ゆとりというのは手を抜くということではなく、好きなことを楽しみ、新しいアイデアを生み出すということなのでしょう。今日はありがとうございました。

(本座談会は、平成18年10月30日に札幌で行いました)